

第5回生物多様性 神戸プラン 2020 推進委員会 議事録

1. 開催日時 平成 27 年 6 月 10 日（水） 14 時 00 分～16 時 00 分
2. 開催場所 市役所 3 号館 3 階 環境局大会議室
3. 出席者 武田委員、橋本委員、花田委員、横山委員、島本委員、安井委員、北条委員、横田委員
4. 議事内容
 - (1) 平成 26 年度における生物多様性保全に係る事業の実施状況および平成 27 年度における生物多様性保全に係る事業の実施計画について
《自然環境共生課より資料 1、資料 2、資料 3 及び生物多様性保全市民行動宣言の実施について説明》
《意見交換》

<橋本委員>

市民会議で宣言を行ったという説明があったが、委員は何名いるのか。

<磯部課長>

環境関係以外にも自治会等も参加しており、個人も含めだいたい 50 名が参画している。

<橋本委員>

自然関係の団体は入っているのか。入っているのであれば、会議に出席している方から、どのように会員等に広げていくかが重要である。

<花田委員>

何点か質問させていただきたい。

生きものがしガイドは、毎年修正したり、配布対象を変えたりしているのか。

それと、アカミミガメは外来種、ニホンイシガメは在来種という説明があったが、クサガメの位置づけはどう考えているのか。また、明石市でもアカミミガメ防除の取り組みを行っているが、明石市との連携はどうしているのか。成果等共有すればよいと思うが。

持続性のある緑地の面積として、約 35,000ha 以上という目標を掲げており、実績として、約 35,000ha の状態が続いており成果が出ていない。目標を考えてはどうか。

今見られない神戸の生きものの種数について、これ以上増やさないという目標があり、実績では希少種 1 種アイナエを再確認とあるが、この意味は。

こうべ版 GAP に取り組む農家の登録人数という目標があるが、GAP とは何か。

行動宣言については、学校と連携してはどうか。地域産農産物の給食への導入やピオトープなどが考えられる。

<磯部課長>

生きものさがしガイドについては、毎年、小学校 3 年生に配布している。また、内容については、配布した学校の先生にアンケートを取り、毎年ブラッシュアップしている。

<横田部長>

今回は外来種についてのページを増やし、詳しく記載した。また、裏表紙にマンガをつけるなど、外来種問題について少し強めに書いている。

<磯部課長>

クサガメの位置づけについては、わが国の生態系等に被害を及ぼす恐れのある外来種リスト（案）にアカミミガメと並んで掲載されていたが、専門家からもいろいろ意見が出たようで、最終的に公表されたリストからは外された。

明石市とはこれまでも情報交換等を行っており、また、先日は県民局の呼びかけに応じて、東播磨地域で行われた情報交換会にも出席しており、連携に努めている。

捕獲調査においても、明石市が平成 26 年度に瀬戸川水系での駆除を実施したことを踏まえ、その上流域にあるため池で捕獲調査を行うなど配慮している。

永続性のある緑地については、市街化調整区域を減らさないという理念目標に近いものである。

今見られない神戸の生きものの種類を増やさないという目標についても、絶滅させないという意味であり、理念的な目標である。絶滅したという確認が難しいことから今見られないという表現を使っている。再発見されたから今見られない生きものが 1 種減る、というような評価はせず、レッドリストを見直す際に評価を行うこととしている。

神戸版 GAP は、生産者グループが、安全・安心な野菜を出荷するために大事なことを生産者自らがチェックしながら生産し、出荷していくという仕組み。認定制度になっており、単に自らがチェックすれば良いというものではないと思われる。

行動宣言の学校との連携については、生きものさがしガイドに記載するなどしたい。

<橋本委員>

アカミミガメの防除について、今回の調査地点を選んだ理由は。

<磯部課長>

文献や目撃情報を集約したうえでフィールド調査を行い、アカミミガメが多い場所やイシガメが確認された場所を選んでいる。

<事務局>

アカミミガメの影響について、昨年の調査で主に草本を食べていることが分かっているが、河川やため池での植物の生産量は非常に多く、植生への影響を立証することは非常に難しいと考えている。また、植物の中には外来種も多く見られ、外来種を減らしているのではという見方もできる。一方、昨年の調査で明石川の中上流域には少

数ながらイシガメの生息が確認された。このことから、イシガメを守り、生息環境を確保するという考えに基づき、競合するアカミミガメの防除を実施するという方向で、取り組みを進めることとしている。行政としての取り組みを市民参画で実施していくためには、防除を行う理由を明確に示す必要があると考えている。

今年度の調査もイシガメが見られた河川、その上流域のため池や昨年イシガメが見られたため池を選んでいる。

<橋本委員>

アカミミガメの駆除といっても、まんべんなく実施するのは無理がある。まさに質問した趣旨にもお答えいただいたが、なぜ行っているか答える必要がある。効果的な駆除のシステムを構築してほしい。

<武田委員>

今回の調査で、クサガメとイシガメの雑種は確認されているのか。クサガメの影響も無視できないと思うが。

<事務局>

今年度の調査で雑種と思われる個体が、河川で4匹、ため池で1匹捕獲された。クサガメが外来種リストから外れたこともあり、あやふやな扱いになっている。雑種を形成するといった影響も認識しているので、須磨水族園への委託調査の中でも、クサガメによる生態系への影響について評価するよう指示しているので、水族園とも調整しながら進めていきたいと考えている。

<安井委員>

それに関連して、フィールドでよく足のないイシガメを見ることがある。おそらくアライグマによる食害と思われるので、更にアライグマの防除を進める必要があると思われる。

<横山委員>

カメラを設置して調査を行ってはどうか。アライグマについては、我々の調査でもアカガエルを捕食する場面をカメラに収めている。少し衝撃的な映像ではあるが広報効果はあると考えている。いずれにしても、水辺の生きものは概ね食害を受けており、このような現状を広く周知していく必要がある。

<橋本委員>

冬期湛水の成果について、実際農家が行い組んでくれなければ意味がない。研究会への参加農家は増えているのか。

<磯部課長>

JAや農業改良普及センターは毎回参加しているが、農家は時々興味のある方が来られる程度である。

<橋本委員>

生物多様性の向上ということで、直接支払交付金を見込んでいくことになると思う

が、私が調べたところ、滋賀県は非常に取組面積が多かった。兵庫県は少なく、滋賀県の十分の一程度。

冬期湛水で交付金を受けている人はいるのか。

<磯部課長>

冬期湛水ではない。生物調査が交付対象になった際、農政部局の説明会で資料を作成し配布を行ったが、まだ広がっていない状況。

<橋本委員>

数値指標の永続性のある緑地面積には、生産緑地は含まれるのか。今後、生産緑地に指定されてから30年経過しても自治体がいずれ買取れないケースが出てくると思われる。永続性のある緑地に含まれているのであれば、そうなっても緑地として担保される。

<島本委員>

緑地について、これまでは宅地造成など開発によって減ってきた。数値目標となると難しいが、これからは単に緑地を守るのではなく、環境のために土地利用のあり方そのものを考えるという発想が必要だと思う。

それと、生物多様性の認知度についての指標があるが、「意味を知っている」という割合を増やしていくといっても一朝一夕にはいかない難しい問題だと感じている。先日の生物多様性をトピックとして取り上げた広報こうべを見せていただいた。その中で市長のメッセージが書かれていたが、素晴らしい文章で、生物多様性の認知度に大きく貢献したのではないかと。

<島本委員>

活動団体への補助事業の話があったが、例えば、オオキンケイギクの駆除をしようとした場合、補助事業の対象になるのか。

<事務局>

対象になる。

<島本委員>

アカミミガメの防除など、水辺で行う活動はある程度の経験が必要で、参加者が限られてくる。例えばオオキンケイギクの駆除は誰でも参加しやすいし、議論も活発になるのではないかと。

<北条委員>

先ほど、生物多様性保全方針などを定めて取り組んでいる企業数という目標の話があったが、実際に個々の企業がどのような取り組みを行っているか把握しているか。

<事務局>

方針について、多様性に特化した方針か、環境方針の中に部分的に多様性のことが定められている方針かという部分までの把握にとどまっている。

<北条委員>

エコファースト企業の集まりの中で、琵琶湖で外来種の駆除を実施した。何らかの

集まりを作って、方向付けをしていくという手もある。企業は、生物多様性保全と言われても、何をしてもよいかわからないというのが本音だと思う。一度、方針を定めているような企業が、実際どんなことを実施しているのか調べてみてはどうか。

<磯部課長>

情報収集の方法がわからないという声もあるので、経済同友会やグリーンカンパニーネットワークでピアールさせてもらっている。一部はホームページで紹介している事例もある。また、ご相談させていただきたい。

<横田部長>

神戸独自の環境マネジメントシステムとして **KEMS** がある。これまでは、エネルギーや廃棄物という切り口だけだったが、生物多様性も対象に加えた。

<磯部課長>

京都市にも同じように **KES** という環境マネジメントシステムがあり、その中ではおすすめメニューのようなものがあつた。そういったメニューを作って誘導するという方法も考えられる。

<橋本委員>

企業責任という点では、**CSR** 活動はやや疲弊してきている印象がある。一方で、サプライチェーンにおいて、悪いものを調達しないという方向が進んでいる。

<北条委員>

サプライチェーンは重くなってきている。しかし、実際のところ、まずはコンプライアンスが重要で、まだ生物多様性まで手が回っていない。

<花田委員>

例えば、木材の調達などでも、良いと思っていたものが実際にはそうではないことが分かり、失敗して影響を受けている企業もある。緑のカーテンを実施する場合も植物の調達から考える必要が出てくる。

(2) 「生物多様性 神戸プラン 2020」及び「神戸版レッドデータ 2010」の改定について

《自然環境共生課より資料 4～資料 5 を説明》

《意見交換》

<橋本委員>

鳥獣害対策をもっと強く打ち出してほしい。ご専門の横山委員の知見をもっと反映する必要があるのではないか。

<横山委員>

シカについては、神戸、三田地域で、有害捕獲で 20 頭捕獲されており、南下が進んでいる。

<事務局>

神戸市域でいえば、三田との境にあたる道場地域、最近では武庫川を渡った右岸側でも、樹皮剥ぎなどシカの食害を確認している。

<横山委員>

シカの場合は、農業被害もあるが、自然環境への影響が甚大である。下層植生がなくなってしまう。

<安井委員>

里山も重要であるが、神戸であれば、ぜひ里海という切り口を入れてほしい。更には、ホットスポット調査を兵庫運河で実施してはどうか。希少種を含め、様々な生きものが戻ってきている。

<武田会長>

農業の衰退は、在来の生態系に大きな影響を与えている。特に草原性の植物への影響は大きく、こういった環境の保全をぜひ新しいプランに盛り込んでほしい。人の減少は保全の担い手の減少にもつながっている。

<花田委員>

大阪で鳥が見られなくなったのは、ため池や田んぼが減っているからだということを知ったことがある。農業の衰退が、生物多様性に影響していると感じている。

<橋本委員>

そういった意味でも、行政内での生物多様性の主流化を日々進めていただきたい。

<武田会長>

特に山間の水田は多様性が高いので、何らかの対応が必要。

<横田部長>

例えば、兵庫県は環境と農政が同じ部局にある。神戸市では別の部局となっているが、そういった状況で環境局が何をするかというところが一番の課題である。それと、生態系への影響をどこまでケアするかという点も課題となっている。どの時代の生態系に戻したいのかをよく考えた上で、その設定した目標のために殺処分をも辞さないという強いポリシーを持ちたい。幸い、今の生物多様性ラインはスタッフも充実している。施策立案でも、市民参画などに踏み込んだ仕事をしている。

<武田委員>

地域の活性化とともに農業の衰退は大きな問題。田んぼの維持管理は、森林管理よりも非常に労力を要する。更に、草を刈れば良いかというと、それだけではうまくいかない。

<横山委員>

今、イノシシも非常に増えており、森林の中も大変なことになっている。この点の対策も進めてほしい。農業の活性化という点で言えば、獣害が農業者の労働意欲を奪っている状況である。

<横田部長>

環境施策は、農業施策など具体性のある施策に比べ、一般的になかなか理解されにくい面がある。

<島本委員>

農業や林業は就業者数も少ないが、生物多様性は市民全員に関わる話であり、非常に重要である。この点を認識して取り組みを進めていただきたい。